

# アール・ブリュットと日常がつながる場の提案

## —アール・ブリュット調査研究と空間デザイン検討—

インテリア分野 柴崎ゼミ A2201714 榎 ゆりか

### 研究の背景

アール・ブリュットとは、人間の内面を絵画や造形によって表現したものである。専門の美術教育に影響を受けず、自らの衝動のままに表現していることから、「話す」と同じ生活行為の一部として捉えることができる。よって、話すことが困難である知的障害者、精神障害者が表現者として位置づけられる傾向にある。近年では、創作活動を行う福祉施設が増加し、ここ 10 年程で、アール・ブリュットの専門美術館が普及した。こうした取り組みにより、アール・ブリュットの存在が世に知れ渡るようになった。一方で、生活行為が形となるアール・ブリュットの表現は、美術館等の展示では伝わりづらい印象を抱いた。アール・ブリュットが認知されるにあたり、どのような発信方法が考えられるのか検討していく必要がある。

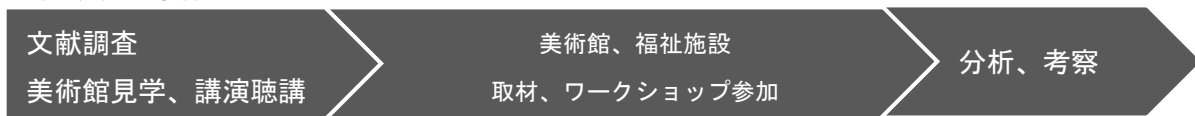
### 研究の目的

アール・ブリュットを発信するにあたり、どのような場が考えられるのか、表現者、作品に向き合うことで考え、明らかにすることを目的とする。

### 計画(研究のプロセス)

研究を進めるにあたり、主に現地調査、文献調査を行ってきた。調査から明らかになったことを分析、考察し、アウトプット(成果物)につなげた。

#### 前期、夏季休業中



#### 後期



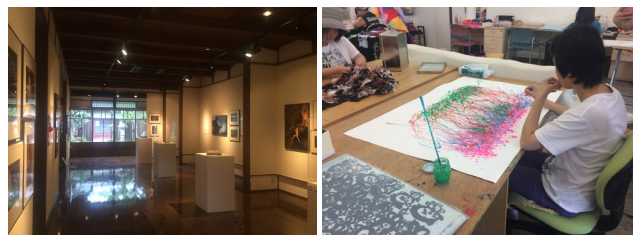
### 【調査研究】

#### ○現地調査

- アール・ブリュット美術館 見学、取材
- 福祉施設 見学、取材
- イベント、ワークショップ参加
  - ・はじまりの美術館
    - (はじまるしえ、榎野さん講演聴講、かるたワークショップ)
  - ・ボランティア学園(4回)
- 三瓶沙也加さんに関する 見学、取材(3回)
- 五百淵公園(提案場所) 調査、取材(3回)



図1 現地調査場所



## 提案作品

デザイン提案ではひとりの表現者と向き合うことで、アール・ブリュットが存在する場、発信していく場を考えていく。

### 【三瓶沙弥香さん】

郡山市の福祉事業所に通いながら、図5のような絵を描いている。日常でのことを文字に起こし、文字が見えなくなるまで重ねられている。すなわち、思いの集積である。多くのこだわりを持っており、特に日の当たるところ（日だまりや光など）が好きである。

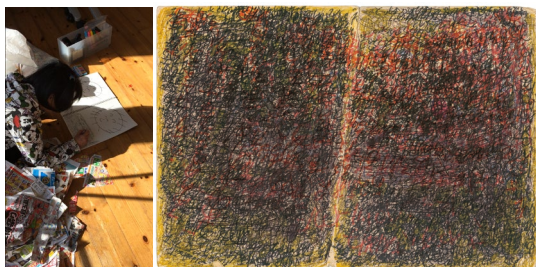


図4 三瓶沙也加さん 図5 作品

### 【五百淵公園】

三瓶さんの自宅から近く馴染み深い五百淵公園を提案場所とした。住宅街に囲まれた敷地でありながら、鳥が多く生息する森がある。桜の名所であり、春になると電灯が灯りそれが三瓶さんのお気に入りの場所である。



図6 五百淵公園



図7 電灯

取材から主に、人、環境が創作に影響していることが明らかとなった。三瓶さんの好きな環境を取り入れ、五百淵公園に訪れた人が立ち寄れるような空間を提案した。自然と人、環境と創作がひとつつながりになるような動線、場の配置を意識した。生活の一部を共有する中で、アール・ブリュットの存在を身近に感じる事が出来る取り組みを施している。

### 【イメージ図】



### 【模型】



## 考察

4月より研究を始め、アール・ブリュットがどうあるべきなのか考えてきた。アール・ブリュットは、表現の過程に重きを置くべきだが現状は絵画、造形の形になることから、美術館での展示という方法がとられていた。実際、表現者が不在の状態でのアール・ブリュットの展示は、作者、作品の本質を伝えることが難しいと感じた。そこで、表現者が身近に感じられるような新しい別の場の提案を考え、現在まで模索してきた。ひとりの人に向き合い考え進められたことは、非常に良い方向に導くことが出来た。表現を垣間みる場が形成されることで、表現者の「声」が伝わりやすくなったように思う。だが、現状の状態では実現性には欠けてしまう。今回考えた提案をさらに考え構築していく必要がある。今回研究を進める過程で、アール・ブリュットが本来どうあるべきかを考えながら研究を進めてきたが、こうした中で既存にあるものを疑い、良い方向にするためにはどうすればいいのかを考えたことが出来た。これは、本研究で構築できた一つの成果であるように思う。これからもデザインの視点をもって日々生活していきたい。